

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

Aoshima, a part of Ehime Prefecture dialect  
accent

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 誠治, 秋山, 英治, SHIMIZU, Masaharu, AKIYAMA, Eiji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002019">https://doi.org/10.15084/00002019</a>

# 愛媛県青島方言のアクセント

清水 誠 治

(日本学術振興会特別研究員)

秋山 英 治

(愛媛大学大学院)

## キーワード

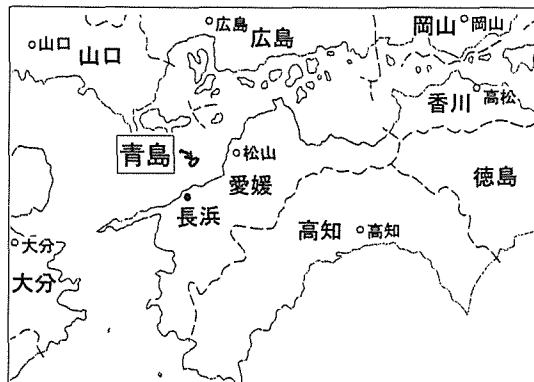
アクセント, 青島方言, 内輪式, 低接性, 所属語彙

## 要 旨

愛媛県喜多郡長浜町青島の方言アクセントについて、音調型、アクセント体系、類別体系の順に報告するとともに、特徴的な現象について分析解釈を試みる。はじめに、音調型について、主として上昇の仕方の特徴と、語の持つ低接性に着目して記述する。次に、「内輪式」に近い体系であることを示す。そして、この島のアクセントが「内輪式」に近いことは、この付近のアクセント分布から見て極めて孤立的であることを言う。また、音調型などの体系の周辺部分に、「中央式」諸方言や近畿方言の一部に報告されている特徴にも共通する点があることを示した上で、この方言アクセントは、青島が、江戸の昔、播州坂越の人々により開かれた島だという史実を反映するものであり、現在の坂越方言アクセントと祖形を同じくする「中央式」の体系から、島という隔離された環境の中で「内輪式」の体系へと独自に変化してきたことを示すものであろうとの仮説を立てる。

## 1. はじめに

愛媛県喜多郡長浜町青島（以下青島とする）は、長浜港の北方13.5kmに位置する、周囲4.2km、人口70人程度の過疎化の進んだ小島である<sup>1</sup>。



青島は、比較的歴史の浅い島で、かつて「沖の水無瀬みなせ」または、「馬島」と呼ばれ、寛永の頃ま

では大洲藩おおすの放牧場として利用されている程度の無人の島であった。寛永16 (1639) 年に播州国坂さか越村こし (現在の兵庫県赤穂市) の漁民与七郎 (後に赤城九郎左衛門と改名。庄屋役を世襲) が青島沖にイワシの好漁場を見つけ、大洲藩の放牧引払いと開拓許可を得、郷里から一族16軒を引きつれて移住し、一浦が成立した。翌寛永17 (1640) 年大洲藩主加藤泰興が鹿狩りを行った際、島の開拓状況を聴取し、島名が「馬島」から「青島」に改名された。青島は、この当時から「時化る伊予灘」の孤島として九州諸大名参勤交代の仮の宿泊地・避難地などにも使用され、赤城家 (庄屋役を世襲) のもとに一浦として独立していたが、明治6 (1873) 年愛媛県に所属、明治13 (1880) 年に長浜町に編入され、そして明治22 (1889) 年長浜町の大字となった。

開島当時の人口は64人と推定される。その後、坂越村や大洲藩の長浜・上灘方面かみなだ、中島なかじまなどからの移住によって人口は徐々に増加し、文化8 (1811) 年には250人、文久4 (1864) 年には305人、明治期の明治44 (1911) 年には人口702人 (戸数128戸) と700人をこす島民が居住しており、非常に栄えていた。明治期以降大正・昭和初期においても600人前後の島民が居住し栄えていたが、昭和30年代あたりから過疎化によって人口が減少し始め、昭和45 (1970) 年には人口224人 (戸数85戸) と全盛期の約三分の一にまで激減した。そして、昭和50 (1975) 年には小学校が廃校となり、現在では人口70人程度の高齢化の進んだ島となっている。

青島の産業については、江戸期以来イワシ漁を中心とした漁業が盛んであったが、若者の島外流出などにより、イワシ漁が操業を休止し、今日では老人による一本釣りなどが行われている程度に過ぎない。

青島へは長浜港から海上約40分の町営の定期船が1日2往復出ており、長浜の町での品物の購入 (島内には店がないため) など島民の足として利用されている。長浜港はJR伊予長浜駅に近く、船便は松山方面行の列車に連絡しており、その利便性の良さから、対岸の長浜町内だけでなく、松山市など中予地方ちゅうよとのつながりも比較的強く見られるようである。

## 2. 目的と方法

そんな青島であるが、この島のアクセントについて具体的に報告されたものは、調べた限りまだないようである<sup>2</sup>。しかし、過疎化の波はこの方言を消滅の寸前まで追い込んでいる。そこで、本稿では、これまで具体的な報告のなかったここ青島の方言アクセントについて、基本となる部分を中心にはじめて報告し分析するものである。本稿は、1996年8月から1998年5月にかけて行なわれた、通算4回の調査結果に基づいている。話者は以下に示す合計6名の方々である。なお、配列は年齢順となっている。

お名前	生年	備考	調査年月日
後藤フサエ氏 (女)	1922 (大正11)		1996.8.7
播磨美和子氏 (女)	1926 (大正15)		1998.5.24
浜井ユキ子氏 (女)	1928 (昭和3)	大阪に20年近く在住	1996.8.7
立脇 芳氏 (女)	1929 (昭和4)		1997.9.1, 1998.5.24
藤井 融氏 (男)	1934 (昭和9)	現在は長浜に在住	1997.8.30, 1998.4.23

藤井ヒロミ氏(女) 1938(昭和13) 同上 同上

何れの方も、15歳までのいわゆる言語形成期は青島で過ごされているとのことである。

ただし、全ての話者から同じだけの語数を聴けているわけではなく、また、各話者ごとに調査者が異なっている(具体的には、別稿に掲載予定)。

本稿の大部分は、調査票に、上野善道氏の私家版「アクセント分布調査票(A)」, 文部省重点領域研究「日本語音声」の「全国共通項目調査票1990年5月改訂版」, 新田哲夫・中井幸比古(1994)の資料をもとに私的に編んだものを用いた、読み上げ式の調査結果をもとにする。ただし、音調型の特徴の考察に際しては、自然談話で得られたデータも活用する。

今回の分析に関わる調査語の各話者を通じての延べ語数は、1998年12月現在で、以下の通りである。「体言」には名詞の他に、副詞・連体詞・接続詞と、形容動詞・サ変動詞の語幹も含む。また、ここには、普通の単語読み上げ式の調査ではなく、「高野山」や「高野豆腐」の「高野」など、複合語の構成要素という形を調査した語も含む。動詞・形容詞は終止形の数を示す。

1 拍体言…62語	2 拍体言…523語	3 拍体言…561語	4 拍体言…550語	(体言総計…1696語)
2 拍動詞…28語	3 拍動詞…131語	4 拍動詞…44語		(動詞総計…203語)
2 拍形容詞…4語	3 拍形容詞…66語	4 拍形容詞…72語		(形容詞総計…142語)

全語のデータは示す余裕がないので別稿に譲るが、各分析に際して必要な用例は出来るだけ挙げた。

### 3. 音調型

この方言に最初に接した時、「角々しい」音調だという印象を受けた。ここでは、そんな印象を持った理由を探りながら、音調型の特徴を整理していくことにしたい。

なお、本稿では、音調表記に次のような記号を用いる。

’ = 大幅な下降, ! = 中幅な下降, ” = 拍内下降,  
「 = 大幅な上昇, % = 中幅な上昇, 「 = 拍内上昇

この他、○ = 任意の自立語の拍を表す。

また、核は / ’ / で示し、その有無と位置は、0型(=平板型)、1型(=頭高型)のように、便宜的に数字に置き換えて示すことがある。

なお、2. で断ったように、本稿は4拍までの語について中心に述べるものであるが、この節に関しては便宜的に5拍以上の語を例示することがある。

#### 3.1. 上昇の遅れに関して

はじめに、上昇の仕方とそれに関連する現象についてみていく。

この方言では、しばしば上昇が遅れ、下降の直前の拍、あるいは語(文節)末拍のみが卓立する現象が観察される。以下、藤井融氏の発音を示す。

ブラ「サ’ ガル(ぶら下がる), チューゴク「ゴ(中国語),

ハナ「ガ（鼻が），ケチンボ「ガ（けちん坊が）

この卓立は，発話された「句（音調句）」の一箇所だけに大きく実現するものようで，二文節以上が一つの句で発音されたものについては，必ず第一文節内に大きな卓立があって，後ろの文節には卓立がないか，あっても小さく弱いものである。以下，藤井融氏の発音を示す。

クル「マ（車）

クルマ「ガ（車が）

トモダチ「ノ'クルマ（友達<sup>の</sup>車）

クルマ「ト'クル%マ（車と車）

ただし，この1拍卓立の現象は，人にもよるようだが，自然談話中によく聴かれ，読み上げ式の調査の方が出難いということがある。実現の頻度には発話スタイルが関わっているものようである。

この現象に関連して，第1拍目も高く実現される現象，すなわち，音調の山が二つ出る「台頭後起型」などと呼ばれる現象も聴かれることがある。これも，読み上げ式の調査では出難く，自然談話により多く観察されるようである。藤井ヒロミ氏の発音を示す。

「ナ'ダラ「カ'ナユーカ（「なだらかな」というか）

cf.%ナダラ「カ'ナカン'ジャ「ネ'ー（なだらかな感じだね）

この手の音調は，青島の約30km東方に位置する睦月島<sup>むつきしま</sup>でも顕著に聴かれる。そこでの音調は，第1拍目は「高」というよりむしろ「中」に近い（田中江扶・清水誠治(1997)参照）。だが，ここ青島では，そうした高さで出ることもあるが，明らかに「高」の高さで出てくるものの方が圧倒的に多い。この台頭後起の音調と，頭高型の文節末拍がプロミネンスにより卓立した音調とが同じ形態になり，頭高型か平板型か判断に迷う例がいくつかあった。後藤氏の発音を示す。

「ア'メ「ガ（飴が），「ア'メ「ガ（雨が）

「カ'ラ「ガ'ア'ラ%イ（殻があるよ [独白]）

ただし，この問題は，前に「この」をつけるなどの形で発音してもらうなどするとすぐに解決する。

コ「ノ'アメ「ガ~コ「ノ'アメガ（この飴が）→「飴」は「平板型」と解釈

コ「ノア'メ「ガ~「コノ'ア'メガ（この雨が）→「雨」は「頭高型」と解釈

「カ'イノカラガ%ア'ライ（貝の殻があるよ [独白]）→「殻」は「平板型」と解釈

なお，時には，第1拍目と後方の高い拍とに挟まれた間の拍が，中程度の高さを実現することもある。立脇氏の発音を示す。

「ア!カイ「ロ（赤色）

「ア!カムラサキ「イロ（赤紫色）

この他，どの拍から上昇したのか判断に迷うような音調も稀にはあるが聴かれる。後藤氏の発音を示す。

ハ%タケ「ガ（畑が）

クル%マ「ガ'オイ'ー（車が多い）

この上昇の位置が定まらない音調は、特定の環境（後続文節が頭高型）の場合に多く聴かれるものようで、それについては3.2.でも触れる。

更に、特に読み上げ式の調査では、語（文節）頭から高く始まり、語（文節）末までそのまま高く続くような音調が、また、稀に、「中」程度の高さから始まり、核の直前の拍、あるいは語（文節）末拍のみが卓立するような音調が聴かれる。今回の調査では、一番年齢の若い藤井ヒロミ氏の発音に多く聴かれた。その藤井ヒロミ氏と、浜井氏の発音を示す。

「アメガ（飴が）＜藤井氏・浜井氏＞

「ニワトリ～%ニワト「リ（鶏）＜浜井氏＞

「タチグイソ'バ（立ち食い蕎麦）＜藤井氏＞

「クルマト'クルマ（車と車）＜藤井氏＞

この音調は、第1拍目から高く始まるという点では、「中央式」諸アクセント地域で聴かれる＜高起式＞（＜平進式＞）の音調に似ている。ただし、中井幸比古(1990a)によれば、京都方言などの＜高起式＞の音調は、高く始まり、後方に向かって、「自然下降に従う」ものようである。しかし、青島方言で聴かれる高く始まる音調は、テープを聴き直す限り、自然下降には従わず、核の直前の拍、あるいは文節末拍に向かって、同じ高さが保たれたままのように捉えられる（核の後ろでは自然下降しているよう）。また、愛媛県内の八幡浜<sup>やわたはま</sup>周辺でも、自然下降に逆らう音調が観察されるが、八幡浜周辺では、語（文節）単独の形、あるいは句末文節内といった発話環境では、末拍に向かって、自然下降が聴かれることもある（清水誠治(1999)参照）。しかし、ここ青島では、同様の発話環境でも、末拍に向かう上昇があったり、なくても、同じ高さが保たれている状態が持続しているように捉えられる。このことから、青島方言で聴かれる音調の方向は、「下降」が現れない限り、後方に向かって、常に「上向き」であると考えられる。

このように、青島方言では、上昇の仕方についていくつかの音調パターンがあるようだが、いずれの現象も、どうやら同じ語において聴かれることがあるもので、すなわち、実現に語による対立はなく、発話スタイルがある程度関与するものの、型の区別の要因にはなっていない。また、人により出て来る頻度に差があるようでもある。そういうわけで、青島方言では、こうした音調の実現は、すべて音韻論的な対立を持たないまま存在しているものと考えられる。この方言では、上昇の有無と位置は、アクセントの弁別に関与しないのである。

### 3.2. 文節末の下降と語の持つ「低接性」

以上、上昇の仕方に特徴があることを見たが、それに加え、この方言では下降がやたらと多いということも特徴的である。その下降というのは、もちろん核によると考えられるものもあるが、他にも現段階でわかっているだけで三種類のものがある。本稿では、そのうち二種類のものを分析する<sup>3</sup>。

その一つは、以下に示す「この車」「魚が獲れる」といった類いの二文節以上の連文節や短文の形などの発話環境において、文節末に聴かれるものである。藤井融氏の発音を示す。なお、該当の下降には下線を施す。

「コノ'クルマ (この車)

サカナ「ガ'トレ'ル (魚が獲れる)

ハコ「ノ'フタ%オ'オク (箱の蓋を置く)

この下降は、語種や音環境などを問わず出てくるものようである。ただし、調査が始まったばかりの頃は出難く、調査が進行して調査に慣れてきたと考えられる頃から出てくる回数が増してきた話者もいたことから、出方に発話スタイルが関係する可能性がある。

なお、後続文節が頭高型の場合は、次のような特定の出方をすることが多い。藤井融氏の発音を示す。

ドコ%ノ「ウ'シロ (どこの後ろ)

トモダチ%ノ「ウ'シロ (友達の後ろ)

ゴマ%ガ「ア'ル (胡麻がある)

すなわち、前文節内で文節末に近い拍から上昇し（この具体的な位置は正確には定めかねるが、概ね前文節の最後尾拍かその1つ前の拍からのよう）、後続文節の頭の拍がより高く実現する音調が多く聴かれるというものである。しかし、下降する例がないというわけではなく、次のようなデータを得ている。藤井融氏・ヒロミ氏の発音を示す。

コ「ノ'カード (このカード) <融氏>

クマ「ガ'デ'ル (熊が出る) <ヒロミ氏>

この現象は、山口幸洋(1996)で「文節末下降」としてまとめられた現象に該当するものと思われる。また、愛媛県内では、八幡浜市周辺でもこれとよく似た音調が観察されるが、それは、語の持つ「低接する」性質によるもので、それが、後続文節という環境において現れたものだと考えられる(清水誠治(1999)参照)。青島で観察される現象と、八幡浜市周辺(特に八幡浜市内)で観察される現象は、両者ともに、語種を問わず、後続文節が頭高型の場合を除き、徹底的に出てくるものである。また、聴き心地も非常によく似ていることがある。恐らく青島方言での現象も、八幡浜などと同じ、語の持つ「低接する」性質によるものと思われる。

語の持つ「低接性」は、いわゆる「中央式」諸方言にある「高起/低起」の<式>の対立のうち、「低起」の方の<式>の性質である。青島方言では、この性質は、何かの対立的要素として存在するものではない。しかし、これが、以前に<式>の対立があり、それが合流した際の痕跡であるとする見方も可能であると考えられる。出方は異なるものの、「中央式」諸方言に特徴的な現象に共通するものとして注意を要する現象であると思われる。

### 3.3. 低接する付属語

この方言で観察される特異な下降のうちの二つ目は、無核の語につく付属語の直前の下降である。いずれも自然談話の例からひく。なお、該当の下降には下線を施す。

・「じゃ」

ココ「ラ'ハタケ'ジャケン「ナ'ー (ここらは畑だからねえ)

cf.ハ「タケガ'セマ'イ' <後藤氏>

- ・「まで」  
「ツ' イサイキン' \_マデ (つい最近まで) cf. サイキン「ワ <藤井ヒロミ氏>
- ・「へ」  
ツ「ボ' \_エイレ' トク (壺へ入れておく) cf. ツボ「ガ <藤井ヒロミ氏>  
カミナ「ダ' \_エヨメイリシトツタケド (上灘へ嫁入りしてたけど) <後藤氏>
- ・「よ」  
コレ「ガ' アレ' \_ヨ (これがあれだよ) cf. アレ「ガ <藤井ヒロミ氏>
- ・「とか」  
スイ「カ' \_トカ (西瓜とか) <立脇氏>
- ・「なんか」  
「バンチ' \_ナンカ (番地なんか) <立脇氏>

ただし、強調その他で付属語部分に卓立が生じるなどした場合は下降しないことがある。

ヒゲ「ジャ' ナイ, 「カミ' カ「ナ' \_ (「髭」じゃなくて「髪」かねえ) <後藤氏>

これらは、「低接する」という性質を持った付属語なのではないかと考えられる。

これらのうち、「まで」「へ」「よ」は、和田実(1984)、中井幸比古(1996)などによれば、近畿「中央式」方言で低接するものようである。また、「じゃ」については、断定の「や」も近畿「中央式」で低接することから、共通性が伺えよう<sup>4</sup>。したがって、この下降は、付属語の持つ「低接する」という性質が現れたものと考えられる。だとすれば、3.2. で見た自立語の低接性同様、ここにも「中央式」方言 (この場合は特に近畿の?) に共通する現象が観察されるものといえよう。体系の根幹に関わるものではないが、注意すべき現象と思われる。

#### 4. アクセント体系と類別体系

青島方言のアクセント体系と類別体系についてみていく。

##### 4.1. アクセント体系

青島方言の4拍語までのアクセント体系を示すと、以下のようになる (／／は省略)。

○	○○	○○○	○○○○	0型
○'	○' ○	○' ○○	○' ○○○	1型
	○○'	○○' ○	○○' ○○	2型
		○○○'	○○○' ○	3型
			○○○○'	4型

型の弁別に、<式>や上昇の位置は関与しない、<下げ核>の有無とその位置のみが関与する体系である。東京方言と同じくn拍到n+1の型の区別がある。Pn=n+1の体系と表される。

##### 4.2. 類別体系

青島方言の類別体系をアクセント型と併せて示す。なお、動詞・形容詞については終止形のア



クセントを示す。

- 1 拍名詞 第1類 (0型) / 第2・3類 (1型)
- 2 拍名詞 第1類 (0型) / 第2・3・5 x類 (2型) / 第4・5 y類 (1型)
- 3 拍名詞 第1・6類 (0型) / 第2・4・5・7類 (2型)
- 2 拍動詞 五段第1類・一段第1類 (0型) / 五段第2類・一段第2類 (1型)
- 3 拍動詞 一段第1類 (0型) / 五段第1類・五段第2類・一段第2類・第3類 (2型)
- 4 拍動詞 五段第1類・五段第2類・一段第1類・一段第2類・第3類 (3型) = 一型
- 2 拍形容詞 (1型) = 一型
- 3 拍形容詞 第1・2類 (2型) = 一型
- 4 拍形容詞 第1・2類 (3型) = 一型

2拍名詞の類の統合の仕方からみると、青島方言はいわゆる「東京式」に分類される。しかし、一口に「東京式」といっても、「東京式」は、2拍名詞と1拍名詞の類別の仕方の違いによって「外輪式」「中輪式」「内輪式」の3タイプに分けられる<sup>5</sup>。青島方言の2拍名詞の類別体系をみると、「1/2・3/4・5」で「中輪式」「内輪式」のどちらにも分類されるが、1拍名詞の類別体系が「1/2・3」であることから考えると、「内輪式」に分類されることになる。

ただし、ここで一つ問題がある。それは、2拍名詞第5類が1型・2型の二つの型に分かれており、これら二つの型を、どのように扱えばよいかということである。本稿では、便宜上2型の語群を5 x類、1型の語群を5 y類としたが、1型を類の型、2型を類の例外の型と考え、「内輪式」と判断した(具体的には5.1.で述べる)。

また、体言のみならず用言に関しても、山口幸洋(1985)であげられている1拍名詞の類別体系以外の「内輪式」の特徴(「非中輪式の特徴」とよく一致しており、「内輪式」的な特徴が窺える(具体的には5.3.で述べる)。

## 5. 品詞ごとの体系や所属語彙の特徴

品詞ごとの体系や所属語彙の諸特徴については、別稿でやや詳しく述べる予定なので、ここでは注意すべき点についてのみ触れておく。

### 5.1. 2拍名詞第5類について

青島方言の所属語彙の大きな特徴として、2拍名詞第5類が1型・2型の二つの型に分かれることがあげられる。その内訳について、その他の型の語も併せて示すと、以下のようになる。なお、□=別の話者では1型で出ている語、△=別の話者では2型で出ている語、○=別の話者では0型で出ている語を表す。

- 1型 藍, 秋, 汗, 兄, 雨, △<sup>あゆ</sup>鮎, 桶, 牡蠣<sup>かき</sup>, 蔭<sup>きび</sup>, 黍, 蜘蛛<sup>こい</sup>, 鯉<sup>さけ</sup>, △<sup>さけ</sup>鮭, 猿, 足袋, 露, 鶴, 鍋, 春, 鮒<sup>かな</sup>, 前, 窓, △<sup>まゆ</sup>繭, 婿<sup>むこ</sup>
- 2型 青, 赤, 朝, 虻, □<sup>あゆ</sup>鮎, 井戸, 黒, 声, □<sup>さけ</sup>鮭, 白, 縦, 常, 鱧<sup>はも</sup>, ○<sup>ひる</sup>蛭, □<sup>まゆ</sup>繭, ○<sup>もも</sup>股
- 0型 △<sup>あゆ</sup>蛭, 蛇, △<sup>まゆ</sup>繭, △<sup>もも</sup>股

これらの型の区別に、母音の広狭など音声的な特徴を見出すことはできない。しかし、ここで注目されるのは、青島方言の2型の語群に、添田建治郎(1996)のいう、萩市見島や長崎県など「京都の中央から隔絶した周辺部方言」でも例外となり、また文献上第5類であることが確認されていない、第5類語としての成立が新しい、その出自が第5類でなかった可能性のある語が多くみられるということである。添田(1996)によれば、出自に問題のあるのは、「青、赤、朝、牡蠣、黒、琴、鮭、白、常、鱧、鮎、蛇」の12語で、それらは次の五つの場合にわけられるようである。

- |                    |            |
|--------------------|------------|
| ①1類の可能性のある語        | 青・赤・牡蠣・黒・白 |
| ②A類(「〇〇」)の可能性のある語  | 常          |
| ③C類(「〇〇」)の可能性のある語  | 蛇          |
| ④3類の可能性のある語        | 朝・琴・鮭・鱧    |
| ⑤D類(「〇'〇」)の可能性のある語 | 鮎          |

もともとどの類に所属していたかということはひとまず措いて、これら出自に問題のある語を除けば、青島方言の第5類は、以下のようになる。

1型 藍, 秋, 汗, 兄, 雨, △鮎, 桶, 蔭, 黍, 蜘蛛, 鯉, 猿, 足袋, 露, 鶴, 鍋, 春, 前, 窓, △〇繭, 婿

2型 虻, □鮎, 井戸, 声, 縦, ○蛭, □〇繭, ○股

0型 △蛭, △〇繭, □股

明らかに1型の語が多く、1型は21語あるのに対して、2型はわずか8語である。しかも、その8語のうち、「虻」<sup>あぶ</sup>、「鮎」<sup>あゆ</sup>、「蛭」<sup>ひる</sup>、「繭」については青島島内には生息していないために、あまりみかけることはなく、また「井戸」<sup>いも</sup>、「股」についても、武智正人(1957)によれば、長浜町方言として「ツルベ」「モモタ」などの方言形があげられており、青島方言でもこのような俚言形が使われている可能性がある。このような諸々の事情を考慮すると、もとの2型の語は「声・縦」の2語だけになってしまう。以上より、2型が類の例外の型、1型が類の型となることは明らかで、よって青島方言の2拍名詞の類別体系は、「1(0型) / 2・3(2型) / 4・5(1型)」となり、1拍名詞の類別体系も考慮した結果、「内輪式」に分類されるのである。

この事実は、青島方言もかつては萩市見島方言など「京都の中央から隔絶した周辺部方言」と同じように、2拍名詞第5類の所属語彙は今よりも少なく、その後新しく第5類語として成立した語によって所属語彙を増やしてきたという可能性を示唆しており、大変興味深い現象である。

ところで、2拍名詞第5類が二つの型に分かれるという現象は、愛媛県内では青島方言だけに見られる現象なのであろうか。愛媛県南予地方の分布状況ならびにその変遷について述べた清水誠治(1995)によれば、x類y類それぞれの所属語彙が必ずしも完全には一致しないものの、宇和島市約22km沖の宇和海に浮かぶ日振島<sup>ひぶりしま</sup>周辺にも同様の現象が見られるようである。また、上野善道(1989)の資料によれば、萩市見島方言と同じ類別体系「1・2 / 3 / 4・5」を持ち、また「1 / 2 / 3 / 4 / 5」のいわゆる第一次アクセントを持つ伊吹島の隣の島として注目される愛媛県魚島<sup>うおしま</sup>方言でも第5類が二つの型に分かれているようである。これらの事実は、一体どのような意味を持つのであろうか。日本語諸方言のアクセントを考察する上で、大変興味深い事実であるが、

本稿では指摘のみにとどめ、その問題については別稿に譲る。

## 5.2. 3拍名詞の頭高型と尾高型について

3拍名詞では、多くの語が0型か2型に所属しており、1型(頭高型)への所属語彙が少ない。今1型の語を挙げれば以下の通りである。

ここで、▲=同じ話者で2型と併用がある語、△=別の話者では2型の語、●=同じ話者で0型と併用がある語、○=別の話者では0型の語、■=同じ話者で1型と併用がある語、□=別の話者では1型の語。ただし、全ての語について全ての話者に確認しているわけではないので、併用の様子はあくまで参考程度である。

<sup>ざくろ</sup>  
石榴…第5類

△後ろ、△○便り、▲病い…第7類

▲狸、▲蚩…X類(金田一春彦氏がどの類に入れていいか不明とされたもの)

△アイス(〜とホット)、▲アップ(成績が〜)、カード、△カーブ、各地、▲感じ(〜がいい)、ジュース、ダウン、▲千葉市、▲電話、▲奈良市、△二十、▲ノック、パンチ(殴打;パーマ)、■□マッチ(〜を擦る)、ミラー、△ラジオ、レモン、ロード(ロードショーなど;プロ野球で、〜に出る)、悪さ(〜をする)…類別語彙以外

このうち、この方言では、外来語は2型の他に1型になりやすい傾向がある。

また、「各地」「悪さ」は伝統的な方言にある言葉ではなく、マスコミなどを通じて知ったと考えられる言葉である。語が受け入れられる際、アクセントも同時に(アクセントもそのままの形で)受け入れられたのではないかと考えられる。

「便り」も文章語的な語であり、伝統的な方言ではないと思われる。受け入れのシステムは上記「各地」などと同じと思われる。

「<sup>ざくろ</sup>石榴」は全ての話者で、「後ろ」は一人の話者を除いて1型である。「石榴」の属する第5類、「後ろ」の属する第7類は、共に2型の傾向があり、1型というのは極めて珍しい事例といえる。もしかすると、俚言形が他にあつて、最近使われ始めた言葉であるために、共通語や交流の機会のある周辺方言の影響でこうなっているかとも思われるが、「石榴」の型は共通語形であり、また、青島と直接接触しやすいと考えられる松山方言の実態とも一致するからそうとも考えられるものの、「後ろ」の型の方は共通語形でもなく、長浜や松山辺りの型とも違っている。現段階では判断し難いところである。

「狸」「蚩」については俚言形の存在も予想され、だとすれば「各地」などのように輸入語ゆえの理由も考えられるが、同じ話者から2型も同時に確認されており、あるいは言い間違いだったのかもしれない。「千葉市」「奈良市」については、今回の調査で一番年齢の若い藤井ヒロミ氏から聴かれたものである。これらの語について尋ねたもう一人の藤井融氏では2型であった。1型というのは、これらの場合、前部成素「千葉」「奈良」の1型がそのまま生かされているということにもなる。地名独特のアクセント法則があるのかも知れないが、現段階では不明。

3拍名詞では、1型(頭高型)と共に3型(尾高型)も少ない。以下、3型の全用例を挙げる。記

号の意味は1型の例に同じ。

○漆<sup>うるし</sup>、○今年、●○桜、○三日…第1類

▲△小豆、●○女、△毛抜き、○△二重<sup>ふたえ</sup>、△三つ、△娘…第2類

あした  
明日、五日、▲△男、△思い、△言葉、縫い目、▲△袋、△襖<sup>ふすま</sup>…第4類

○▲親子、▲○単衣<sup>ひとえ</sup>…第5類

■△南…X類

うちこ  
内子(地名)、○こころ(～で一服;～とあそこら)、ちんば(不具合なこと)、▲○菜種、△口ノッポ、▲話し、○みんな、○私<sup>わたし</sup>…類別語彙以外

3型は、殆どの語が別の型との併用である。しかも2型との併用が多い。実は、今回調査に応じて頂いた方の中ではもっとも高年の後藤氏が3型を頻出している。また、3型の割合が高いのは、大正生まれのお二方で、昭和生まれの4人の方ではぐっと減る(具体的には別稿を予定)。このことから、年齢の軸だけから見ると、この方言内において、3型(尾高型)→2型(中高型)という変化が見て取れることになる。各地方言でよく報告されるところの、「尾高型が嫌われていく傾向」がこの方言においても見られるものと考えられよう。

なお、3型が確認された語の中には、再び聴いてみると2型となる例が多数あった。そうならなかったのは、「明日」<sup>あした</sup>、「五日」<sup>うちこ</sup>、「内子」<sup>うちこ</sup>、「ちんば」「縫い目」だけである。このうち、「明日」「五日」「内子」は2拍目の母音が無声化するため、2型をとり難いと考えられる。「縫い目」は、後部成素「目」のアクセントがそのまま生かされているものか。

ところで、この3型の語の中では、「明日」「五日」をはじめ、「今年」「三日」「三つ」など、時間・数量を表す単語が含まれている。また、「ちんば」はいわゆる蔑視語(expressiveな意味の語)である。この他の調べた範囲での蔑視語と考えられる語は、「盲」「ぎっちょ」がそれぞれ2型と1型というものであった。しかし、一人の話者で「ノッポ」にも3型が確認されており、蔑視語が3型をとりやすいという傾向もありそうである。

時間・数量を表す言葉や蔑視語(expressiveな意味の語)が3型をとりやすいというのは、関西諸方言の特徴としてよく報告される事例である。ここでも、音調型の特徴を見ていった時と同じように、近畿方面の方言に特有の現象と共通する現象が体系の周辺部にあることが確認されたものといえる。

### 5.3. 用言について

用言の特徴を、終止形に限定していえば、2拍、3拍動詞では二型であったのが、4拍以上の動詞になると一型になっていること、また2拍から4拍すべての形容詞が一型になっていることなどがあげられるが、ここでは、終止形を含むそれら用言の活用形について、いわゆる「東京式」諸方言の用言の活用形の特徴について述べた山口幸洋(1985)であげられている「内輪式」の特徴と比較しつつ、少し詳しく述べる。なお、詳細については、稿を改める。

山口幸洋(1985)であげられている「内輪式」の特徴をまとめると、以下の五つになる<sup>6</sup>。ただし、今回の調査では山口幸洋(1985)とすべて同じ活用形を調査しているわけではないので、完全な形で

比較することはできない<sup>7</sup>。例えば、③・④・⑤の「部分的」な活用形と比較できるのは、過去形だけで、このように条件付きでの比較であることを前提としてみていく。

① 3拍・4拍形容詞の第1類と第2類が有核型で統合している。

② 3拍・4拍一段動詞の第1類と第2類が有核型で統合している。

③ 3拍・4拍一段動詞の第1類と第2類の活用形が部分的に同じ有核型をとる。

④ 2拍一段動詞の第1類と第2類の活用形が部分的に同じ「有核型または無核型」をとる。

⑤ 五段動詞の第1類のある種の活用形が第2類と部分的に同じ有核型をとる。

①の特徴について、青島方言では、3拍形容詞第1類（例：赤い）・第2類（例：白い）はともに2型、4拍形容詞第1類（例：悲しい）・第2類（例：楽しい）はともに3型をとり、3拍・4拍形容詞の第1類と第2類が有核型で統合している。

3拍形容詞	第1類	第2類
終止連体形	アカ' イ	シロ' イ
4拍形容詞	第1類	第2類
終止連体形	カナシ' イ	タノシ' イ

②の特徴について、青島方言では、4拍一段動詞第1類（例：並べる）・第2類（例：集める）はともに3型で統合しているが、3拍一段動詞第1類（例：捨てる）は0型、第2類（例：建てる）は2型をとり、第1類と第2類は統合していない。

3拍一段動詞	第1類	第2類
終止連体形	ステル	タテ' ル
4拍一段動詞	第1類	第2類
終止連体形	ナラベ' ル	アツメ' ル

③の特徴について、青島方言では、3拍一段動詞第1類・第2類の過去形はともに1型<sup>8</sup>、4拍一段動詞第1類・第2類の過去形はともに2型で、3拍・4拍一段動詞の第1類と第2類の活用形が部分的に同じ有核型をとる。

3拍一段動詞	第1類	第2類
過去形	ス' テタ	タ' テタ
4拍一段動詞	第1類	第2類
過去形	ナラ' ベタ	アツ' メタ

④の特徴について、青島方言では、2拍一段動詞第1類（例：着る）・第2類（例：見る）の過去形はともに0型（無核型）で、第1類と第2類の活用形が部分的に同じ「無核型」をとる（終止連体形も併せて示す）。

2拍一段動詞	第1類	第2類
終止連体形	キル	ミ' ル
過去形	キタ	ミタ

⑤の特徴について、青島方言では、2拍五段動詞第1類（例：置く）の過去形は2型（0型も）、第2類（例：取る）の過去形は1型で同じ型をとらないものの、3拍五段動詞第1類（例：当たる）・

第2類（例：動く）の過去形はともに2型，4拍五段動詞第1類（例：転がす）・第2類（例：動かす）の過去形はともに3型で，2拍を除く五段動詞の第1類と第2類が部分的に同じ有核型をとる（終止連体形も併せて示す）。

2拍五段動詞	第1類	第2類
終止連体形	オク	ト'ル
過去形	<u>オイ'タ</u>	<u>ト'ッタ</u>
3拍五段動詞	第1類	第2類
終止連体形	アタ'ル	ウゴ'ク
過去形	<u>アタ'ッタ</u>	<u>ウゴ'イタ</u>
4拍五段動詞	第1類	第2類
終止連体形	コロガ'ス	ウゴカ'ス
過去形	<u>コロガ'シタ</u>	<u>ウゴカ'シタ</u>

以上，これら五つの特徴と青島方言の用言がどの程度一致しているか，山口幸洋(1985)であげられている「内輪式」八地点と併せて示すと，以下のようになる。なお，記号は，○=その特徴に該当する，×=その特徴に該当しない，△=その特徴の傾向がやや弱いものを表す。

	①	②	③	④	⑤
青島	○	△	○	○	△
名古屋，岐阜	○	○		○	○
飛騨	○	×		○	○
十津川，上下北山	×		○	○	△
大塔，洞川	○		○	○	△
但馬	○		○	×	×
岡山，落合，福山	○	×		△	×
美作大部（津山など）	×	×		×	×
幡多	×		△	△	△

条件付きとはいえ，それでも青島方言の用言の活用形は，これら五つの特徴に比較的良好に符合しており，しかもその様相は名古屋，岐阜方言や飛騨方言とよく似ている。また，本稿で取り上げていないが，実は青島方言は名古屋，岐阜方言と〈下げ核〉の有無・位置がほぼ同じである。山口幸洋(1985)のいうように，名古屋，岐阜方言を典型的な「内輪式」とするとすれば，これら諸特徴や核の有無と位置の類似する青島方言も，典型的な「内輪式」と考えられる。

また，山口幸洋(1985)のいうように「内輪式文節アクセントにみられるいくつかの変化が，語アクセントに関わる減少傾向（統合？）なのだ」とすれば，名古屋方言でまだ統合していない3拍・4拍五段動詞第1類と第2類が青島方言で統合しているのは，かつての第1類と第2類の区別が，「語アクセントレベルの対立」の減少によって失われたのであり，つまり青島方言は，典型的な名古屋方言よりさらに変化の進んだ典型的な「内輪式」として考えることも可能であろう。

#### 5.4. 特殊拍と核の関係について

次に、青島方言での特殊拍と核の関係について触れておく。なお、この節での音調表記は、便宜的に、上昇に関する現象は示さず、下降の有無とその位置のみ示す。

まず、／ッ／は、多くの方言でそうであるように、この方言でも、他の特殊拍とは違った振る舞いをするようである。すなわち、例えば、キ' ック（蹴り）かキッ' クかのように、その直後に下降するか、あるいは前の拍の後で下降するかの聴こえの違いがあるようだが、音声レベルのもので、音韻論的な対立はないものと見られる。

一方、／ン、一、イ／については事情が異なっている。いま、便宜的に／ン、一、イ／を「M」と置き換える。

2拍名詞では、第2類の「杭」、第3類の「貝」「姪」が、同じ類の語の大半が○○' と出るのにもかかわらず○' Mで出たり、「金」「用」なども○' Mで出ている、○M' の例がない。このことから、Mは核を担うのを嫌うものと考えられる。

しかし、3拍名詞や4拍名詞を見て行くとそうとも言えない例が見つかる。

3拍名詞でも、語末拍にMを持つ語には、2拍名詞同様、語末に下降が現れる語はない。

問題となるのは、2拍目にMを持つ語についてである。この拍構造で、有核型で出た例を示せば次のようになる。

a). はMの直後で下降している(○M' ○)語。b). はMの1拍前か後で下降している(○' M ○・OMO')語である。

そのうち、繰り返し発話を求めるなどして調べた結果、■=同じ話者でa). またはb). に併用が見られた語、□=別の話者でa). またはb). であった語、@=別の話者では0型の語、をそれぞれ示す。ただし、全ての語について併用の確認を行っていないわけではないので、ここでの記号もあくまで参考程度である。

##### 2拍目がMの例

a). □アイス、相手、インド、映画、大井(大井川;大井競馬場)、大津(滋賀の)、□カーブ、ガイド、@会話、■感じ(～が悪い)、鮑、キャンプ、胡瓜、京都、郷土、金魚、@源氏(平家と～;源氏物語)、格子、@高知、@紅茶、高野(高野豆腐;高野山)、広野、細工、珊瑚、世紀(～の大事業)、整理、戦後、定期(預金.～にする)、@天気、電気、電子、@電車、■電話、ドイツ(国名)、同士、豆腐、@通り、パイプ、番地、ビール、平家(源氏と～)、@法師、坊主、ボール(球)、ポンプ、料理、りんご…以上○M' ○

b). □アイス、カード、□カーブ、■感じ、ジュース、■電話、パンチ(殴打;パーマ)、ロード(ロードショーなど;プロ野球で、～に出る)…以上○' M ○

ちんば(足の不自由なこと、人)…○M ○

両者を比較すると、数としてはa). に含まれる語、すなわち○M' ○で出ている語が圧倒的に多い。

そのa). に含まれている語には、b). と比べて、漢語が、しかも「紅+茶」「電+気」のように「2拍+1拍」の形態素に分解可能な複合語が多い。その語構成の語でb). に分布している語はわ

ずかに「電話」のみである。この「電話」も同じ話者で a). の音調型でも出ている。この語構成の場合出やすい音調型がこの OM' O であると考えられる。

a). には、「<sup>かん</sup>匏」「<sup>きゅうり</sup>胡瓜」といった、類別語彙に含まれるような古くからあると考えられる和語や、「アイス、ビール」といった外来語で、形態素の切れ目のないものも多く分布している。「胡瓜」「匏」が 2 型というのは、いわゆる「東京式」アクセントのうち、周辺部方言において見られる傾向で、四国でも、山口幸洋(1986)によれば、「胡瓜」が、<sup>すくも</sup>宿毛市や土佐清水市などで 2 型であるという。「東京式」と呼ばれるもののうちの「内輪式」に分類されるこの青島方言でも、同じ傾向があるものではないかと考えられる。

外来語については、b). に属する語にも多く、その全てが O' MO で出ている。外来語が 1 型の傾向は、多くの方言に共通してみられる傾向である。青島方言で、外来語の音調が OM' O と O' MO の二通りの出方をする様子は、それぞれの所属語について、語の意味や予想される使用頻度、この方言にとっての新旧などの条件では説明できそうにない。

これらのことから、3 拍名詞を見ると、M は、核を担い得、語末ではその性質は現れないものと考えられよう。

4 拍名詞では、尾高型の所属語彙が、わずか 1 例「わたくし」にしか見つかっていない。したがって、語末拍に M を持つ語で語末拍の直後に下降している例も見つかっていない。

ここでも、問題となるのは語中拍に M がある場合である。

2 拍目が M の例を見る。 a). は M の直後で下降している語 (OM' OO)。b). は M の 1 拍前後で下降している語 (O' MOO・OMO' O)。記号の意味は 3 拍語に同じ。

a). @<sup>うーろん</sup>烏龍(烏龍茶)、<sup>うんしゅう</sup>温州(みかん)、運賃、@狼、大島(地名)、音楽、監督、キューピー、@兄弟、@京都市、<sup>こうもり</sup>蝙蝠、三陸、@正月、商売、神経、<sup>しんまち</sup>新町(地名)、スーパー、セールス、線香、仙台、<sup>そうめん</sup>素麺、大学、大根、@台湾、中学、中国、ちよいちよい(「ちよくちよく」の方言形)、天竜(地名。あばれ〜)、入道、人形、<sup>ほうじょう</sup>婆ちゃん、番号、ハンドル、@北条(地名)、夕顔、来月、ろうそく…以上 OM' OO

b). ウォーター、キャンデー、サービス、スポーツ、センター、ちゃんぼん、等分、ナイロン、ラーメン、ワンツ、@ワンマン…以上 O' MOO

a). には、「運+賃」「大+学」など「2 拍+2 拍」の構造の漢語が多く分布する。その語構成の場合に出やすい音調型が OM' OO なのであろう。

ここでも「狼」「<sup>こうもり</sup>蝙蝠」「<sup>そうめん</sup>素麺」が、山口幸洋(1986)の報告する、四国西南部の土佐清水市などの「東京式」の実態と一致する。

外来語は、b). にやや多いが、a). にも見られ、散らばっている模様。

次に、3 拍目が M の例を見る。 a). は M の直後で下降している語 (OOM' O)。b). は M の 1 拍前で下降している語 (OO' MO)。記号の意味は 3 拍語に同じ。

a). ■お天気、不審火…以上 OOM' O

b). 妹、鶯、■お天気、弟、火曜日、土曜日、飛行機、ビニール、ブレーキ、@ブレンド、湯豆腐…以上 OO' MO



a). への分布は2例のみで、殆どがb). に集まっている。語構成的には、a). に属する「不審火」は「不審+火」というもので、形態素の切れ目に核があるとも考えられようが、同じ語構成の「飛行機」がb). に属しているから、語構成の関与は必ずしもあるとはいえない。あるいは、青島方言での、語の集まりやすい型（基本アクセント型）が2型であって、もともと別の型であったものもそこに集まりつつある状態と考えることも出来るかもしれないが、今のところ、その証明も難しい。

いずれにせよ、これら2拍語から4拍語までのことを総合すると、Mが語末にあってその直後で下降する例は、2拍語から4拍語までない。しかし一方、拍構造上語中拍にMが来得る3・4拍名詞については、Mが核を担い得るとしてよいと考えられる例がいくつも見つかる。したがって、青島方言では、基本的に、Mは核を担い得るものであるが、語末にある場合には、尾高型の例が少ない（嫌われる傾向にある）という体系的な制約の後押しもあって、例が見られないものと考えられる。

#### 5.5. その他、各類の所属語彙について

類別体系に基づいて所属語彙を整理してみると、2拍名詞第5類に二つの型の対立が見られることその他にも、各類の中で例外となる語がばらばらと見受けられる。

周辺方言と比較しながら、簡単に見て行く。

周辺方言について、これまでに発表されている具体的なアクセント資料があるのは、松山市について報告した上野善道(1995)と秋山英治(1996)、中島町<sup>なかじまちょう</sup>について報告した清水誠治(1997)である。これらと比較してみると、型は異なることがあるものの、瀬戸内方言の特徴ともいえる、共通する例外が幾つか見つかる。二人以上の話者に共通して聴かれた例外を、青島での型とともに示せば、以下のようなものである。ただし、その語を聴いた話者全員において型が一致しない語（△印を施す）も含む。なお、第口類の次の（ ）内は、その類の代表的な型。

##### 2拍名詞

第1類（0型）…△滝、△真似<sup>まね</sup>（2型）

虫（1型）

第2類（2型）…痣、虹（1型）

第3類（2型）…靴 [ただし中島でのみ]、熊（1型）、

第5類（1または2型）…蛇（0型）

##### 3拍名詞

第6類（0型）…大人（2型）

一方、この方言独特の例も以下のように見つかる。

##### 1拍名詞

第2類（1型）…日（0型）

##### 2拍名詞

第1類（0型）…△雉（1型）

第2類(2型)…梨, 橋(1型)

第3類(2型)…<sup>かめ</sup>濃, <sup>へら</sup>瓶, 雲, 栗, 鉢(1型),

第4類(1型)…鞘, 篋(0型)

### 3拍名詞

第1類(0型)…△形, 鯉, 相撲, 羊(2型)

△今年, △桜, 三日(3型)

このうち, 1拍名詞第2類の「日」について, 中井幸比古(1990b)で, 岡田荘之輔氏の報告に, 兵庫県東南部の「垂井式」に近い東京式において, 同じ類の中で違った振る舞いをする事で例外となっているとあり, この現象は, 金田一春彦(1977)で当該地域周辺が「内輪式」とされているポイントの一つにもなっているのではないかという指摘がある。また, 中井幸比古(1991)には, 3拍名詞第1類の「桜」が, 丹波地方で軒並み1類の他の語とは外れた振る舞いをする事が指摘されている。例数は僅少だが, 青島の周辺の方言に無く, 近畿方言(特に周辺部方言?)の特徴に共通する現象が, ここにもまた見られたものと考えられる。

## 6. 分布の特異性と史実との関係について

ここで, 青島方言アクセントの地理的位置を確認しておきたい。

対岸の四国本島の長浜町周辺では, 山口幸洋(1997)など一型アクセント方言が行われているという報告が一般的である<sup>9</sup>。また, 長浜町より東側の伊予市辺りから松山市にかけてはいわゆる「中央式」に相当する体系が分布しており, 西側の<sup>ほないちよう</sup>保内町から佐田岬あるいは八幡浜市には, 「第1・4・5類/第2・3類」(2拍名詞)の体系が見られる(清水誠治(1995)参照)。更に, 中国地方側は, 金田一春彦(1977)の分布図などから, いわゆる「中輪式」と考えられ, そうすると, この方言の近くでの「内輪式」の体系の存在はこれまで報告されていないということになる<sup>10</sup>。いまだ報告のない「内輪式」がこの周辺に無いとすれば, 青島方言は分布上かなり孤立的である。

ところで, 1. で見たように, 青島の人々の直接の祖先にあたる人々の大半は, 播州<sup>さきこし</sup>坂越からやってきたという歴史がある。現在の坂越方言のアクセントについて報告したものは調べ得た限り見つからなかったが, 坂越の属する赤穂市のアクセントについて報告した久野マリ子(1982)によれば, 同じ赤穂市内の福浦本町地区のアクセントは, 本稿での用語に便宜的に置き換えていうと, 「中央式」の性質をある程度留めた「垂井式」に近い体系だと捉えられる。また, 坂越は赤穂市内でも地理的に相生市寄りである。相生市のアクセントは, 久野マリ子(1982)によれば, いわゆる「中央式」(本稿での用語に置き換える)である。これらのことから, 現在の坂越方言のアクセントが, 「中央式」に近い「垂井式」か「中央式」かであることは充分予想が出来る。このことと歴史的な面を単純に結び付けると, 青島方言の体系は, 現在の赤穂市や相生市で行われているような, 「中央式」あるいはそれに近い「垂井式」の体系と, 祖形を同じくするものであると考えられる<sup>11</sup>。

ところで, 「中央式」である現在の京都方言では, 体系が, いわゆる『補忘記』方言の時代から変化していないというのが通説である。また, 上野善道(1987)など, 「垂井式」は, 「中央式」が,

いわゆる「高起／低起」の<式>の対立を失って成立したとする説もある。そうすると、現在の赤穂市方言の中間タイプは、形としてはわりと新しく、近い時代まで完全な「中央式」が行われていた地域だと見ることも出来よう。このことを考え合わせると、赤穂市内の坂越方言においても、体系の枠組みは、青島への移住があった寛永の時代から、現在に割と近い時代まで「中央式」のままであったと考えることも可能であろう。また、久野マリ子(1982)などによれば、坂越から更に西へ数キロ行った日生辺り(?)に「内輪式」あるいはそれに近い体系が分布していることから見て、祖形となる坂越方言は、「中央式」の体系であるが、もともと「内輪式」にも近い、あるいは「内輪式」への変化の可能性を含んだものであったとも考えられる。

また、これまで見て来たように、青島方言の中に、「中央式」諸方言に特徴的な現象が、出現形態は全く同じではなく、数も少ないものの存在していたりすることから考えると、やはり、青島方言と坂越方言との間に直接的なつながりを感じざるを得ない。

これらの点から考えて、現在の青島方言の体系は、坂越方言と同じ祖形を基盤として、青島において、独自に成立したものであるという可能性が高いといえよう<sup>12</sup>。それは、孤島という周囲からかなり隔離された位置においてなら為し得た変化と考えられる。

## 7. まとめ

以上、青島方言アクセントについて、基本的な部分を報告すると共に、そこに見られる特徴的な現象を中心に解釈を試みてきた。

最後にやはり気になるのは、体系としては「内輪式」に近いものであるにもかかわらず、音調型や所属語彙といった体系の周辺部分に、「中央式」方言、あるいは近畿周辺方言において特徴的な現象が散見されることと、この島の成り立ちに関する移住という歴史との関係である。移住元である坂越の周辺方言は、現在、「中央式」、あるいは「中央式」の特徴を持った「垂井式」に近いものだと報告されている。「中央式」の体系が坂越において江戸の昔に行われていたものとすれば、現在の青島方言において聴かれるアクセントの特徴は、動かし難いこの島の歴史を言葉の側面から物語るものということにもなる。

このことから、かつて、この島で「中央式」から「内輪式」への変化が独自に起こったという仮説を呈示するものである。また、別の言い方をすれば、「中央式」から「内輪式」への内的変化は起こり得るものであり、歴史的な事実支持されながら、青島はそれを示す方言アクセントの行われている格好の島であると考えられよう。

## 注

- 1 島の概要については、『角川日本地名辞典38愛媛』(1981)角川書店、『愛媛県百科事典』(1985)愛媛新聞社、『昭和を生き抜いた人々が語る 瀬戸内の島々の生活文化』(平成3年度地域文化実態調査報告書)(1992)愛媛県生涯学習センター(藤井大輔氏からそのコピーをご提供頂いた)、ならびに、話者の方のご教示による。

青島には、現在でも青島神社の祭神秦河勝や盆踊り(赤穂義士踊り)、また盆踊りの歌詞(兵庫音

戸)・島民の姓(赤穂・播磨・赤城)などに播磨国坂越浦から移住したその痕跡が残っている。

2 清水誠治(1996)で、3拍名詞のアクセント分布図の中にプロットしたことがある。ただし、それは雑なもので、本稿4.2.での解釈が正確。

3 他に、主として6拍以上の多拍語では、ワラ「イ'バナ'シ(笑話)のように、一語中に二回  
の下降が聴かれるということがあるが、この現象についての考察は稿を改めて行なう。

4 当方言でも、断定に「や」が用いられることがあるが、今回の調査では、テープを聴き直す限り、自然談話中に、「や」が低接していることと確定できる例(平板型の語に続く例)は残念ながら見つ  
かっていない。しかし、低接する可能性は十分考えられると思われる。

なお、「中央式」諸方言で低接する付属語の代表的なものに、係助詞(副助詞)の「も」がある。  
これについては、自然談話中の例はいずれも低接しておらず、念のため、立脇氏、藤井ヒロミ氏  
に読み上げ式の調査でも聴いたが、低接することはなかった。

5 「外輪式」「中輪式」「内輪式」については、金田一春彦氏の卓見によって知られるところである  
が、その分類の基準について、山口幸洋(1985)によれば、以下のように整理される。

なお、括弧内の数字は〈下げ核〉の有無と位置を表す。

	外輪式	中輪式	内輪式
1拍名詞	1・2(0)/3(1)		1(0)/2・3(1)
2拍名詞	1・2(0)/3(2)/4・5(1)		1(0)/2・3(2)/4・5(1)

6 山口幸洋(1985)では、これら五つの特徴のうち、②・③はともに3拍・4拍一段動詞についての  
特徴であることから、大枠としては一つの特徴とし、これら二つを下位の特徴に位置付けている。

7 今回調査した用言の活用形については、動詞は、終止連体形・過去形(助動詞「タ」接続形)・否  
定形(助動詞「ン」接続形)・意志形(助動詞「ウ・ヨウ」接続形)・禁止形(助詞「ナ」接続形)・命令  
形の六つの活用形、形容詞は、終止連体形・過去形(助動詞「タ」接続形)の二つの活用形である。

8 なお、3拍一段動詞第1類の過去形には、1型の他に2型も見られる。

9 清水誠治(1995)の調査では、長浜でも、話者に対立の意識はないものの、読み上げ式の調査結果  
を眺める限り「第1・4・5類/第2・3類」(2拍名詞)というものも確認された。

10 八幡浜より更に南の宇和島周辺、また、青島の東側の中島町の島々で観察される「東京式」ア  
クセントは、清水の調査による限り、いずれも、動詞の過去形に関しては一部「内輪式」方言に  
共通する特徴を有するが、1拍名詞の類別体系は「第1・2類=0型/第3類=1型」というも  
のである。

11 久野マリ子(1982)によれば、現在の赤穂市方言では、3拍動詞第2類の類推変化が起きておらず、  
古形が保たれており、また3拍形容詞の第1類と第2類の対立があるようで、これらの記述や2  
拍名詞の類別体系などから考えると、青島方言の祖形と考えられる近世初期ごろの坂越方言は、  
室町末期から近世初期頃の京都方言と同じ、いわゆる「補忘記式」の体系であったと推察される。

ただし、2拍名詞第5類の問題を考慮すると、類別体系の面では、「補忘記式」の体系であるも  
の、所属語彙の面では、地理的に坂越が京都から離れた周辺部であるために、平安末期以降本  
来その出自が第5類でなかった語がすでに新たに第5類語として成立していた京都方言とは異な  
り、まだ第5類語の所属語彙が少ない、いわゆる「名義抄式」の語彙であったと推察される。

12 この他、歴史が語る坂越以外からの青島への移住者は、1. で見た通り、四国本島・青島の対  
岸に当たる長浜や上灘(現在の双海町)、あるいは、青島の約30キロ東側の瀬戸内海に浮かぶ中島  
の出身者であるが、坂越からの移住者がこの島で暮らし始めるより後の入植であり、その数も坂

越からの移住者に比べ少ない(注1に挙げた文献参照)。また、長浜、上灘、中島ともに、現在の体系から見て、青島の開島当時「内輪式」であった地域とは考えにくい。したがって、坂越以外の地域からの移住者の言語が、青島において「内輪式」の体系への変化に「直接的な」力となって働いたことも考えにくいと思われる。

#### 引用文献

- 秋山 英治 (1996) 「松山市方言における3拍名詞のアクセント」『愛媛国語学研究』2, 51-72
- 上野 善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』41-1, 15-70
- 上野 善道 (1989) 「愛媛県魚島方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』17, 59-80, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 上野 善道 (1995) 「松山市方言のアクセント調査報告」『愛文』30, 左1-30 (愛媛大学)
- 金田一 春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『講座日本語11 方言』129-180, 岩波書店
- 久野マリ子 (1982) 「接触地帯のアクセント—兵庫県下の東西両アクセントの接触地帯を中心に—」『講座方言学7—近畿地方の方言—』327-362
- 清水 誠治 (1995) 「愛媛県南予地方における2モーラ名詞アクセントの分布と変遷」『国語学』181, 左43-56, 国語学会
- 清水 誠治 (1996) 「八幡浜周辺アクセントの成立について」『国語学会平成8年度秋季大会要旨』92-99
- 清水 誠治 (1997) 「愛媛県温泉郡中島町のアクセント(1)—神和・中島の音調型・体言についての中間報告—」『日本語研究』17, 43-70 (東京都立大学)
- 清水 誠治 (1999) 「音調型から見た八幡浜周辺アクセントの成立について」『国語学』197, 左13-24, 国語学会
- 添田 建治郎 (1996) 『日本語アクセント史の諸問題』武蔵野書院
- 武智 正人 (1957) 『愛媛の方言—語法と語彙—』愛媛大学地域社会総合研究所
- 田中 江扶・清水 誠治 (1997) 「陸月島方言談話資料(1)—長生きの秘訣—」『日本語研究』17, 85-102 (東京都立大学)
- 中井 幸比古 (1990a) 「式の音調に関する二三の問題について」『香川大学教育学部研究報告』1-79, 43-58
- 中井 幸比古 (1990b) 「京都府における、いわゆる垂井式諸アクセントについて(1)」『国語研究』54, 1-28
- 中井 幸比古 (1991) 「京都府における、いわゆる垂井式諸アクセントについて(2)」『国語研究』55, 1-20
- 中井 幸比古 (1996) 「京阪アクセントにおける低接非上昇調について」『神戸市外大論叢』47, 395-417
- 新田 哲夫・中井 幸比古 (1994) 「アクセントの式の合流について—京都府丹波地方の事例—」『アジア・アフリカ文法研究』23, 69-149, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 山口 幸洋 (1985) 「東京式諸方言の文節アクセント体系」『国語学』142, 23-38, 国語学会
- 山口 幸洋 (1986) 「四国西南部東京式アクセントの性格」『方言研究年報通巻第29巻 方言研究の体系的推進』205-218, 和泉書院
- 山口 幸洋 (1996) 「方言アクセントにおける『文節末下降』について」『第10回日本音声学学会全国大会予稿集』41-46

山口 幸洋 (1997) 「愛媛県喜多郡方言の一型アクセント的特質」『静岡大学人文学部人文論集』47-2, 57-103

和田 実 (1984) 「辞アクセントの記号化」『金田一春彦博士古稀記念論文集2』434-454, 三省堂

**執筆分担** 以下のように分担して、それぞれの責任で執筆した。

題, 1 節, 4 節, 5 節 (5.1., 5.3.), 注1・5・6・7・8・11 …秋山

要旨, 2 節, 3 節, 5 節 (5.2., 5.4., 5.5.), 6 節, 7 節, 注2・3・4・9・10・12 …清水  
キーワードと引用文献は共同で執筆した。

**謝辞** 青島方言アクセントをご教示頂いた話者の皆様に心よりお礼申し上げます。

また、話者紹介や資料提供をして頂いた、垣見正史氏 (長浜町教育委員会)、立脇正之助氏、藤井大輔氏と、英文概要作成の際ご教示頂いた田中江扶氏にも心よりお礼申し上げます。

本稿に関わることの一部には、清水が受けている科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) の一部を充てることができたことを記し感謝します。

本誌査読委員の方から、分かり難い箇所等の詳しいご指摘を受けることが出来たことにもお礼申し上げます。

(投稿受理日: 1998年12月24日)

---

清水誠治 (しみず まさはる)

210-0024 川崎市川崎区日進町6-1-310

HZI06256@nifty.ne.jp

秋山英治 (あきやま えいじ)

791-8035 松山市久保田町108-9

## Aoshima, a part of Ehime Prefecture dialect accent

SHIMIZU Masaharu  
JSPS Research Fellow

AKIYAMA Eiji  
Graduate student, Ehime University

### Keywords

accent, Aoshima dialect, the accent system of Nairin-type,  
low connecting character, vocabulary type

### Abstract

In this paper we focus on the dialect accent peculiar to Aoshima, a part of Nagahama Town, Ehime Prefecture.

First, we illustrate the character of tone, especially, rising-tone and falling-tone observed between sentence fragments.

Second, we show the accent system of Aoshima dialect, indicating that the accent dialect belongs to what is called the Nairin-type, in which the accent of tow-mora words shows "1. /2. 3. /4. 5." and one-mora words shows "1. /2. 3."

We further show that, in peripheral parts of the system (e. g. low connecting character and vocabulary type), Aoshima accent shares the property of Chuou-type, in which the accent of two-mora words shows "1. /2. 3. /4. /5.", one-mora words shows "1. /2. /3." and having two resisters which we call Kooki-shiki and Teiki-shiki.

Finely, we assume that the change of the accent in Aoshima from the Chuou-type to the Nairin-type is closely related with historical evidence that an immigration occurred from Sakoshi to Aoshima.